荒尾市立府本小学校　校長便り　№46

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和7年10月27日(月)

お便り紹介

みんなの居場所へのお便りを頂きましたので紹介いたします。

校長先生へ

　みんなの居場所を読むと校長先生がどのように考え、思っているのかがよく分かります。校長先生のような人が上司ならば、部下は幸せといいますか、仕事がしやすいだろうなと思います。№43の『相手の心を想像して』を読み、全くその通りと思いながら、現代では相手の気持ちを考える、考えられる人の方が疲弊してしまい、少々図太いくらいの人の方が、世の中を渡っていけるのではないかと思ってしまいます。（その人の性分もあるので何とも言えませんが…）個をあまりにも尊重しすぎ、多様性が何にでも謳われるようになり、はき違えていることも多いような気がしています。難しい時代になりましたよね。先生方もご苦労が多いことと思います。先生方の心身の健康が一番です。応援しています。▶

　お便りありがとうございました。「相手の気持ちを考えることができる人が疲弊してしまう…」何となく分かる様な気がします。私も経験があるので、身に積まされます。「なるようにしかならない。」と割り切るとか、「人事を尽くして天命を待つ」というように、やるべきことをやって、後はくよくよしないことが大切なのかもしれません。

　読者の皆様、皆様との意見交流ができる場所として「みんなの居場所」をご活用ください。お便り、心よりお待ちしています。

経験則②「言動」

　言動は相手に対する印象を左右します。低学年ではまだまだ語彙数が少なく、私たち大人との会話では意を尽くせない場合が多いですね。少しずつ語彙を獲得して、正しく論理的に相手に伝える術を身に付けていくのでしょう。そう考えると低学年の先生方の使命の一つと言えるでしょう。でも、この低学年の言動が5年生や6年生で展開されていたらどうでしょう。そう言えば、朝の登校指導中や職員室での子ども達との会話の中で、こんなことがあります。明らかに子ども達に非がある場合、私達教師はその場で指導をします。指導はタイムリーなのが最も効果的だからです。でも、その指導を受けている子ども達の言動について、たまに閉口する時があります。想像できますでしょうか、口を尖らせ不貞腐れた表情です。

　高学年というと、思春期の入り口で保護者としての接し方や担任としての接し方も難しい時期ではあります。しかし、それを放っておくと近い将来に影響が出ます。受験等が最も近い将来と言えるでしょうか。変化の激しい社会になったとはいえ、生身の人間同士のコミュニケーションは基本中の基本です。これがきちんとできるということが、大人への第一歩と言えるような気がします。多少の「ヤンチャ」はあっても良いですが、因果応報という言葉を忘れないで、将来の自分を見つめた行動をして欲しいものです。先ずは自分の言動の見直しを。

シリーズ「自分を語る」#46

　ナイトハイクの参加申込書を配付して、次の日反響に驚かされました。すべての子ども達から参加申込書が提出されたのです。私は保護者の皆さんからの反応やこれまでの大変さから言って、「行事実施が間違いなのではないか?」と弱気になっていました。ところが、申し込みの状況を目の当たりにし、このような行事を欲していた子どもが多いことに驚き、更に行事参加にOKを出してくださった保護者の皆様に感謝しました。

　記念すべき第1回ナイトハイクは、ノウハウの積み重ねも無い状態でしたので、全体のイメージとしては一言で言えば「夜に行う長い遠足」でした。私自身の危機感も低かったようでした。それでも、子ども達はやる気満々で当日を迎えることになります。

　下見で私が独歩した経験を基にコースを設定しましたが、嘉島西小学校を42、195kmのゴールにするためには多少遠回りするコース設定になりました。スタートはJR三角駅ですが、その後天草五橋の一号橋を一旦渡り、引き返してくるという変則コースとなりました。今考えてみればすごい話です、一号橋を徒歩で渡るのですから。辺りが暗かったので恐怖感はあまりなかったのですが、実際には相当な高さがあり、そもそもあの橋は歩いて渡ってよかったのかなと首を傾げる澤田です。

　当時は、初めての試みということで宣伝もしました。役場、ラジオ局、テレビ局、新聞…、あらゆるメディアに取材依頼をしました。案の定、テレビ局、ラジオ局、新聞社、役場の取材がありました。嘉島町の役場は実際に職員を参加させ、行事終了後には広報紙の中に子ども達の対談の記事まで載せて下さった程でした。

　さて、実働部分の話です。第1回目のナイトハイクは先に述べましたように長い遠足でした。班も作らず、ただひたすら歩くだけです。当然のことながら、前半は快調に歩く子ども達でしたが、徐々に差が出てきました。日付が変わる頃には、休憩の回数も増え、更には一人で歩く子どももちらほら。このような中で全体指導をするのですから、私は先頭と最後尾を数回行き来しました。私自身の足腰にも、下見では無かった痛みを感じながらの実働となりました。夜中の3時頃には保護者の車に乗る（乗せて先行に追いつかせる）等の動きも出てきました。携帯電話がまだまだ普及していない頃なので、私からの直接の指示も出せず、先頭と最後尾で何が起こっているのかさえもよく分からずに時間だけが過ぎていきました。最終的に4分の1程の子どもが車に乗っていました。

　ゴールした時、最後まで車に乗らずに歩き通した子とそうでない子の表情は明らかに違っており、私が描いたものとはかけ離れていました。私は「ナイトハイクを通して子ども達に身に付けさせたいもの」について、悶々とした中で考えていくことになりました。この時を境に、ナイトハイクに限らず行事の理想的な姿を考えることになります。特に今回のような行事の理想形とは? まず浮かんで来た事は「①全員が歩き通すこと」、「②競争ではなく協力が大切ということ」、「③達成感や充実感を味わうことができること」「④ゴールではなくそこまでの過程が大事だということ」の4点でした。行事を実施する時、今では感覚的にこの様な要素を織り込んでいくことができますが、当時は経験不足による先見性の無さは否めませんでした。

　完歩できなかった子ども達をこのまま放っておく訳にはいきません…。（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　　可　・　不可　）